

世界遺産運動にみる宗教的地域文化へのまなざし

－長崎の教会群をめぐる－

松 井 圭 介

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| I はじめに | IV 世界遺産運動の活動と人々のかかわり |
| II 世界遺産の分布と特性 | IV-1 「世界遺産の会」の活動実績 |
| III プロデューサーとしての「世界遺産にする会」 | IV-2 「世界遺産の会」の活動事例 |
| III-1 「世界遺産の会」の設立 | V 宗教的地域文化を世界遺産にするこの意味 |
| III-2 「長崎の教会群」はどこに価値があるのか | VI おわりに |

キーワード：世界遺産，長崎の教会群，宗教的地域文化，まなざし

I はじめに

日本では「世界遺産ブーム」とも呼ぶべき現象が、近年とみに顕著になっている。世界遺産への登録が地域経済にもたらす経済効果への期待は大きく、観光振興による地域活性化の切り札と見る向きもある。世界遺産への登録により、旅行雑誌やガイドブック、TV、インターネット等の各種メディアを介して世界中に発信される情報量は飛躍的に増大し、それに伴う観光客の増加が期待されるが、こうした観光客の増加を期待する観光関連業界、地域振興の起爆剤としたい地方自治体や経済団体などの思惑もあり、世界遺産候補地を目指した動きが盛んになっている。2006年には初めて、世界文化遺産登録の国内候補地を公募した結果、11月30日の締め切り時には26の県から24件の応募があった。第1表はその際に各自治体から提出された提案名称と自治体を示したものである。提案されている文化遺産の内容をみると、先史時代から古代の遺跡（青森県の縄文遺跡群（1）やストーンサークル（2）、沖ノ島と関連遺跡群（21）など。（ ）内の数字は第1表に対応）や文化財（松本城（11）、高松塚古墳・キトラ古墳などを含む飛鳥・藤原（15）など）のような従来型に加えて、新しい世界遺産の基準である「文化的景観」をアピールしたもの（出羽三山と最上川が織りなす文化的景観（3）、霊峰白山と山麓の文化的景観（8）、若狭の社寺建造物群と文化的景観（9）など）や「近代の産業遺産」（富岡製糸場と絹産業遺産群（4）や佐渡金山（5）、九州・山口の近代化産業遺産群（20））などが提案されていることがわかる。

文化庁は2007年1月23日、世界文化遺産に推薦するための暫定リストに載せる国内候補として「富岡製糸場（4）」「富士山（14）」「飛鳥・藤原（15）」「長崎の教会群（22）」の4件の追加を決定した。今後関係省庁との折衝を経て、ユネスコの世界遺産委員会に申請される見込みであり、同年夏には正式に暫定リストへの掲載が決定する。わが国における世界遺産候補を公募するという動きはこれが最初であったが、今後も自薦による公募形式が継続する予定だという（文化庁、2007）。

第1表 日本における世界文化遺産暫定リスト入り候補の一覧(2006年11月)

	提案名称	都道府県
1	青森県の縄文遺跡群	青森県
2	ストーンサークル	秋田県
3	出羽三山と最上川が織りなす文化的景観－母なる山と母なる川がつくった人間と自然の共生風土－	山形県
4	富岡製糸場と絹産業遺跡群－日本産業革命の原点－*	群馬県
5	金と銀の島、佐渡－鉱山とその文化－	新潟県
6	近世高岡の文化遺跡群	富山県
7	城下町金沢の文化遺産群と文化的景観	石川県
8	霊峰白山と山麓の文化的景観	石川県・福井県・岐阜県
9	若狭の社寺建造物群と文化的景観－仏教伝播と神仏習合の聖地	福井県
10	善光寺～古代から続く浄土信仰の霊地～	長野県
11	松本城	長野県
12	妻籠宿と中山道	長野県
13	飛騨高山の町並みと屋台	岐阜県
14	富士山*	静岡県・山梨県
15	飛鳥・藤原－古代日本の宮都と遺跡群*	奈良県
16	三徳山	鳥取県
17	萩城・城下町及び明治維新関連遺跡群	山口県
18	錦帯橋と岩国の町割	山口県
19	四国八十八箇所霊場と遍路道	徳島県・高知県・愛媛県・香川県
20	九州・山口の近代化産業遺産群	福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・鹿児島県・山口県
21	沖ノ島と関連遺産群	福岡県
22	長崎の教会群とキリスト教関連遺産*	長崎県
23	宇佐・国東八幡文化遺産	大分県
24	黒潮に育まれた亜熱帯海域の小島「竹富島・波照間島」の文化的景観	沖縄県

*は2007年1月に暫定リスト掲載の国内候補に選定されたもの。

(文化庁, 2007より作成)

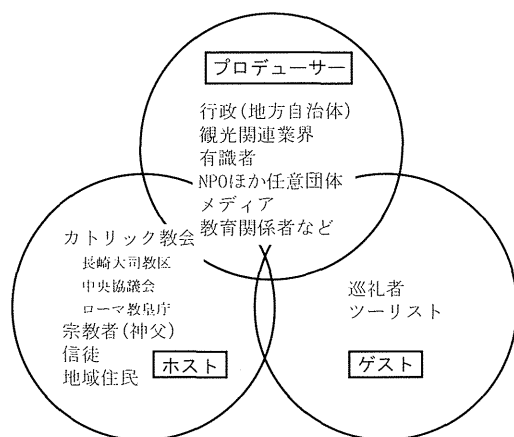
こうした「世界遺産ブーム」の背景には、観光需要の掘り起こしを期待する地域の側だけでなく、観光客側のニーズにもみられる。団塊世代の離職期を迎えて、余暇・観光需要のさらなる高まりに加え、こうした世代は比較的経済的にゆとりがあるうえ、歴史や文化への関心が強く、学習型・教養型観光への志向がある。世界遺産は国内外の時間的・経済的なゆとりをもつ人々にとって、非常に魅力的な観光対象であり、需要と供給のバランスがとれた世界遺産観光は今度さらに市場を拡大していくものと考えられる。

一方で、世界遺産登録によって地域が受けるマイナス的な要素も数多くの指摘がなされてきた。観光客による文化財の破損・汚損といった直接的な被害にとどまらず(Shackley 2003; 松井 2005)、過剰な観光客の受け入れによる地域住民の生活環境の悪化や所得格差の拡大、観光地化による自然

環境や景観の破壊、およびそれに伴う世界遺産としての価値の喪失（例えば合田・有本 2004；才津 2006）などがその例である。加えて、世界遺産登録が持続的な地域発展に結びつくのかについても疑問が呈せられている。世界遺産への登録は一時的な観光客の増加はもたらすものの、直ちに急増するものではなく、むしろ一時的な観光ブームに終わりかねない危険性も指摘されているのである（羽生 2006；内閣府政策統括官室 2005；神田・小野田 2005 など）。

本稿では、先に世界文化遺産候補の暫定リスト入りに決まった「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（以下、「長崎の教会群」）における世界遺産運動を事例にして、宗教的地域文化が「文化遺産」としてのまなざしを受けることの意義と課題を考える（まなざしについては、アーリ 1995：2003；遠藤・堀野編 2004 ほかを参照）。宗教的地域文化とは筆者による造語である。ここでは「宗教的な建造物や信仰の遺跡、現存する聖地などが地域の歴史や風土と密接なかかわりをもつ地域文化の重要な構成要素をなしていること、及びその個々の構成要素をさす」と仮設的に定義しておこう。周知のように長崎は、日本でカトリックの信仰が最も早くから、最も深く浸透した地域であり、カトリックの信仰が地域史の重要な構成要素をなしている（松井 2006）。本稿では、宗教が地域のエートスと深く結びついて歴史・文化を織りなしている長崎を舞台として、こうした宗教的地域文化をめぐる現代的動態として、遺産化の推進を伴う世界遺産運動の視点から分析するものである。

当然のことながら、長崎の教会群を世界遺産にしようとする動きは、特定の団体のみに帰せられるものではない。そこには長崎県や各自治体といった行政や各種経済団体・企業、マスメディア、ツーリストのように教会に対して外部からかかわる主体に加えて、教会関係者や信徒といった教会関係者を含めた無数のアクターの存在がある。第1図は、遠藤（2005）の枠組みを援用して、長崎の教会群をめぐる世界遺産運動の主要なアクターの関係を示したものである。遠藤はツーリズムを構成するアクターとしてツーリスト（消費者）・地域住民・プロデューサーの三極を示したが、世界遺産への仕掛け人という意味では、プロデューサーの果たす役割が大きい。松井（2006）では、その中で地方自



第1図 長崎の教会群をめぐる世界遺産運動の主要アクター
（遠藤 2005 を参考に作成）

治体における観光の現況と行政の側からの仕掛けについて、長崎県と平戸市を事例に検討したが、本稿では前稿に続き、世界遺産運動の先導的役割を果たした「長崎の教会群を世界遺産にする会」(以下、「世界遺産の会」)の理念と活動に焦点をあてることにする。同会は第1図に示したプロデューサーのうち任意団体にあたる。2006年12月現在でNPO化はしていないが、将来的にはNPO組織にすることも視野においている団体である。

論文の構成は以下の通りである。まず始めに世界遺産の定義と分布について概括したうえで(II章)、「長崎の教会群」の世界文化遺産登録を目指す運動の主要なアクターのひとつである「世界遺産の会」が長崎の教会群における何を世界遺産として価値付けているのかを検証する(III章)。続くIV章では、同会の活動事例として2006年10月に長崎県平戸市で開催された講演・見学会の内容と参加者の言説を検討し、最後に宗教的な地域文化を世界遺産にすることの意味を明らかにしたい(V章)。

II 世界遺産の分布と特性

ユネスコ(UNESCO)の世界遺産条約(正式名称「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage))は、1972年のユネスコ総会で採択され、2006年1月現在、182か国がこれを批准している(社団法人日本ユネスコ協会公式ホームページ)。日本が世界遺産条約を締結したのは1992年と比較的近年のことであり、主要先進国では最後の締約国であった。2006年7月現在で、世界遺産リスト登録件数は830件に及んでいる。世界遺産には文化遺産、自然遺産、複合遺産のカテゴリーがあるが、このうち文化遺産の登録が644件と全体の8割弱を占めている。

文化遺産は、顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観などを指す。いずれも歴史上、学術上、芸術上、あるいは人類学上すぐれた価値をもつものが該当する。自然遺産は同じく、地形や地質、生態系、絶滅の恐れがある動植物の生息や生息地を含む地域のうち、学術上、保全上もしくは自然美において普遍的価値を有するものである。また両者の規定を満たすものを複合遺産としている(文化庁2007)。世界遺産に登録を受けるには、あらかじめ各国が「暫定リスト」を作成し、それらの中からユネスコの世界遺産委員会が審査・判定をして、正式登録がなされる。日本ではこれまでに文化遺産10件と自然遺産3件が登録されている。

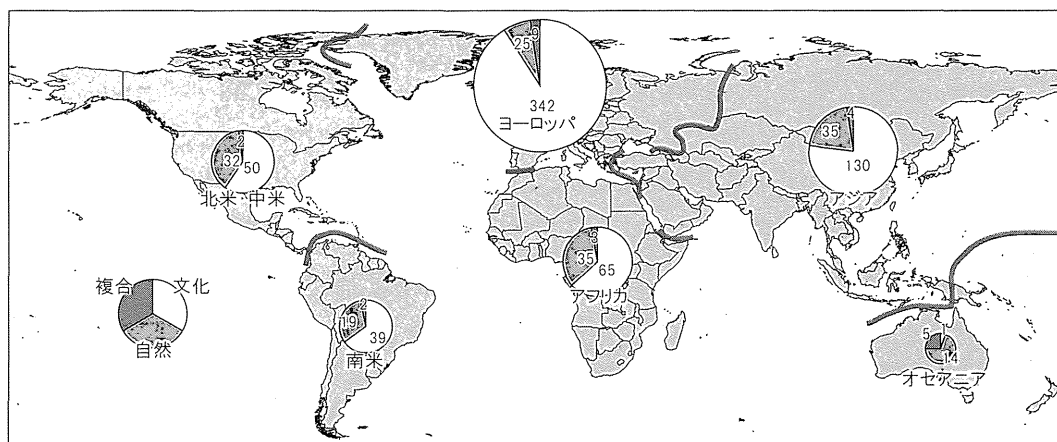
世界文化遺産に登録される基準を第2表に示した。これら6項目のうち最低一つに合致することが条件となるが、「顕著な普遍的価値を有する」と認められるかどうか重要な基準となる。人類学上すぐれた価値を有すると判断されるだけでなく、その遺産のオーセンティシティ(真正性)やインテグリティ(完全性)を満たす必要がある(上野2007)。特に文化遺産の場合、人類の歴史によって生み出された保存されるべき貴重な価値を有するものであることが求められる。世界遺産の分布を示したものが第2図であるが、6大陸別にみると文化遺産ではヨーロッパが342と全体の45%を占めている。

世界遺産条約の採択当初は、戦乱や環境破壊等の危機に瀕していた文化遺産(遺跡)の保護および

第2表 世界文化遺産の登録基準

i	人間の創造的才能を表す傑作である。
ii	ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展において人類の価値の重要な交流を示していること。
iii	現存する、あるいはすでに消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
iv	人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること。
v	ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによって存続が危うくなっている場合。
vi	顕著で普遍的な価値を持つ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること（ただし、きわめて例外的な場合で、かつ他の基準と関連している場合のみ適応）。

(出典は第1表に同じ)



第2図 大陸別・カテゴリー別にみた世界遺産の分布 (2006年)

(社団法人日本ユネスコ協会 HP より作成)

それに伴う観光振興が念頭に置かれていた。その後、世界的に著名な歴史的建造物や芸術作品の登録が進んだ。近年では、産業遺産や負の遺産（原爆ドームやアウシュビッツの収容所など、文化ルート・文化景観など、世界遺産の価値基準が多様化するとともに、地域的なバランスも考慮されている。

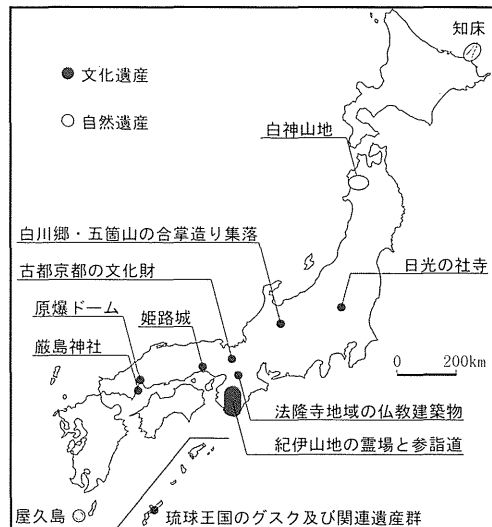
ここで「顕著な普遍的価値」とは何か、という問題が絶えずつきまとう。価値基準が国際社会のパワーバランスや社会思潮によって変化するのは当然としても、世界遺産登録を目指す地域の側とすれば、絶えず登録への戦略を練り直す必要が生じてくる。何が「遺産」とされるのか、またどのようにしてそれが「遺産」とであるとアピールするのか。地域の側では、顕著な普遍的な価値を模索することになる。

こうした中で、文化遺産として宗教的地域文化が重要な意味をもつことは論をまたない。日本でも全10件の世界文化遺産のうち宗教的地域文化と結びつくものが6件（「法隆寺地域の仏教建造物」「古都京都の文化財」「厳島神社」「古都奈良の文化財」「日光の社寺」「紀伊山地の霊場と参詣道」）を占めており、この他にも「武家の古都鎌倉の文化財」や「平泉の文化遺産」が暫定リストに登録されている（第3図）。そして今回、「長崎の教会群」がキリスト教関連として日本では初めて、文化遺産の追加候補となった。このことは、ともすれば負の歴史の側面が強調されてきたキリスト教の信仰に対し、その普遍的価値と日本における独自性を文化遺産として評価しようとする動きであり、日本の宗教史において画期的なことといえる。これまでに、キリスト教関係の日本の宗教建築物のうちで国宝に指定されているのは大浦天主堂一つに過ぎないことから、キリスト教文化に対する文化財としての相対的な評価の低さがうかがえよう。

Ⅲ プロデューサーとしての「世界遺産の会」

Ⅲ-1 「世界遺産の会」の設立

「長崎の教会群」が世界遺産候補に推薦されるにあたり、数多くの人々がその運動に携わってきたが、中でも「世界遺産の会」の運動が重要な役割を果たした。「世界遺産の会」は、長崎県の教会群を世界遺産に登録することを目指すために、教会関係者、地元企業やマスメディア、行政関係者を含めた有志により、2001年9月15日に設立された団体で、現在では約80名の会員で構成されている。これまでに長崎の教会群の持つ建築的価値やカクレキリタンといった地域固有の歴史的・文化的背景などに関する学術調査・研究やシンポジウムの開催、国際交流の推進による文化遺産としての啓蒙活動に地道に取り組んできた。



第3図 日本における世界遺産の分布（2007年）
（文化庁 2007 より作成）

「世界遺産の会」の発行している刊行物（資料1）によれば、会の目的とコンセプトとして以下の記載がなされている。

この会は、長崎の教会群を世界遺産に登録することを旨とする諸活動を行うため、専門家や教会関係者に限らないさまざまな分野の有志が自主的に集まり、平成13年9月15日に発足したものです。

長い信仰の歴史を背景に生み出された素晴らしい価値ある教会群が存在することを長崎県の内外を問わず国境も越えて、できるだけ多くの人に伝達することが大切であり、そのための有効な手段として世界遺産登録を目指しています。

「欧州の教会と比較すると、古くも大規模でも豪華でもないのでは」という受け止め方もあるかも知れませんが、美しい自然の中で、素朴な庶民の生活文化・信仰とともに民衆の力を結集した手作りで生まれた教会建築とその文化は、世界のほかのどこにもない長崎固有のものであり、まさに世界遺産にふさわしいものです。（中略）大事な点は、（世界遺産）リストに登録されることがゴールではなくて、そこからが保存のための本格的なスタートになるということに留意する必要があります。（下線はいずれも筆者）



資料1 「世界遺産の会」発行の刊行物

彼らは教会群を地域の歴史の表出とみなし、それを広く公開・伝達するための手段として世界遺産化を図るものとしている。世界各国ですでに登録されているキリスト教関連の世界遺産と比較すると、長崎の教会群は規模や歴史、壮麗さなどで価値を主張しにくい状況にある。そこで長崎の歴史的固有性が強く主張され、歴史性の景観的表出としての教会群の存在が主張されているのである。

Ⅲ-2 「長崎の教会群」はどこに価値があるのか

それでは「長崎の教会群」のどのような点に世界遺産としての価値を見出しているのだろうか。「世界遺産の会」では、ユネスコの基準に照らして、長崎の教会群の価値として以下の3点をアピールしている。第一に歴史的な価値である。長崎の教会は聖フランシスコ・ザビエルが1550年、平戸に上陸して以来、450年にわたるキリスト教の歴史を有しているが、これは日本のキリスト教史そのものともいえる。聖ザビエルによりわが国に伝来されたキリスト教は、その後の禁教令による弾圧と江戸期を通しての潜伏時代、明治期に入り禁制の高札が撤廃（1873年）されて以降の復活という数奇な歴史をもつが、第2次世界大戦以前に建設された教会堂のうち、日本に現存するものの約半数が長崎県に分布している（川上・土田 1983；川上・土田・前川 1985ほか）。この中には、外国人宣教師の設計指導のもと日本人の棟梁と信者の労働提供により建設されたものが数多く含まれており、教会堂の建物は、信徒にとって先祖から守り継がれてきた信仰の復活の象徴であり、地域史の生証人といえる。このように長崎の教会群は、日本におけるキリスト教の伝来・受容・弾圧・潜伏・復活という世界でも比類のない歴史の景観的表出であり、それを支えているのが日本でもっともカトリックの信仰が根づいた地域＝長崎の信徒たちなのである（松井 2006）。

また長崎では、潜伏時代からの信仰を受け継いだカクレキリシタンの文化が知られているが（宮崎 1996：2002）、現在では五島列島の一部に残存するに過ぎない。さらには日本キリスト教史に燦然と輝く天正遣欧少年使節や、島原の乱でキリシタン農民がたてこもった原城跡をはじめとする数多くの殉教地や関連史跡も残されており、こうした独自のキリスト教関連文化を生みだした長崎のキリスト教の独自性に価値を見出しているのである。

第二に、教会建造物の審美的・芸術的価値である。先述したように長崎の教会のなかには、外国人宣教師がもたらした西洋の建築技法と日本人の在来技術が融合した特色ある建造物も多数残されている（教会写真については三沢・川上 2000の写真集が情景を克明に伝えている）。特に明治初期から大正期にかけて建造された赤レンガや石造の教会堂は「エキゾチック」や「ロマンチック」といった言葉で形容される外観をもつことで知られる。このような外国人宣教師がもたらした西洋の建築技法と、日本人棟梁による在来の建築技術が融合して建設された教会堂は、いわば東西の文化が融合した結果が特色ある教会建築に結実したと強調している。教会建築を語る時に必ず言及される棟梁が鉄川与助である。1889（明治22）年に長崎県の上五島で大工棟梁の家系に生まれた鉄川は、明治末期から昭和初期にかけて長崎県を中心にして、数多くの教会建築に携わった。ペルー神父やド・ロ神父、フレノ神父ら外国人宣教師の影響を受けた作風は、まさに東西の建築文化の融合であり、彼の手がけた教会のうち、青砂ヶ浦教会や頭ヶ島教会（ともに新上五島町）、田平教会（平戸市）が国指定の重

要文化財に登録されているほか、世界遺産候補の教会を数多く生み出している。

第三には地域の風土が育んだ文化景観的価値である。これは近年の世界文化遺産の価値基準において重要視されつつある視点であるが、「世界遺産の会」では、教会が立地する環境を人間と自然の調和した文化的景観として評価するとともに、教会の立地する長崎県内の島嶼部（五島列島や平戸）や西彼杵半島の集落では、農業をはじめとする生業の衰退や少子高齢化・離村に伴う人口減少により、このような文化的景観の維持が困難になってきていることを主張している。このように教会が建てられた場所の周辺環境をも含めた景観の価値の高さと同時に、それを保全することの困難さが強調されているのである。

以上の3点からうかがえるように、「世界遺産の会」では、長崎の教会群が地域の歴史の表象であるとともに、その風土に根ざした存在であること、そしてこの地域史こそが、世界史上でも比類のない日本におけるキリスト教の特殊な歴史の実在であることが強調されている。そしてその歴史の表象としての教会群に審美的・芸術的な価値を認め、それらを保存・公開していくための最良の手段として世界遺産登録を目指しているのである。

世界遺産登録のためには、長崎の教会群が貴重な文化財であることが世間一般に認知され、コンセンサスを形成する必要がある。そこで「世界遺産の会」では、教会や教会関連施設の文化財への登録を推進している。2006年11月現在で国宝1（大浦天主堂）、国指定重要文化財7（旧羅典神学校、黒島天主堂、旧五輪教会堂、青砂ヶ浦天主堂、頭ヶ島天主堂、田平天主堂、旧出津救助院）、県指定有形文化財6（出津教会、大野教会、堂崎教会、旧野首教会、江上教会、宝亀教会）を数えるが、このうち「世界遺産の会」が発足した2001年以降に登録を受けたものが、国指定で4、県指定が2あり、長崎の教会に対する文化財指定が急速に増加していることがうかがえる。

一方で、「世界遺産の会」は、長崎の教会群を過去の遺物としての文化財としてみなしているのではない。木村（2006a）も指摘するように、この会は長崎の教会群の価値を「生きた教会」としてありのままの姿の内に見出し、それを見失わないようにすることを狙いとしている。台風等の自然災害により、破損・劣化が進んだ教会や過疎化による信徒数の減少により維持が困難になっている教会もみられ、早急な対策が必要とされているものの、自治体の財政状況や政教分離の原則もあり、十分に有効な手段が講じられない現状がある。資料1では、「生活の中に息づいた教会本来の宗教施設としての機能と神聖さを、そのまま維持しつつ、貴重な文化遺産として位置づけることが必要」であると。さらに「保存のために、むしろ文化財を時にはいろいろな用途に積極的に活用していくという視点は重要であるが、本来機能を損なった形での安易な転用や活用は、文化的な価値や雰囲気破壊につながる可能性もあり、十分な留意が必要」という。「世界遺産の会」がこれまでに取り組んできた学術調査や啓蒙活動も、こうした生きられた宗教空間としての教会のあり方を本義とし、今のままでは教会とその背景にある歴史とが闇の中に消え去ってしまうのではないかという強い危機意識に突き動かされて活動しているのである（木村 2006b）。

したがって「世界遺産の会」は、教会のあるがままの保存という課題に対し、強い意識を保持している。例えば会の発足機縁は、五島列島の奈留島（現五島市）で開催された建築修復学会であったが、

この場所は事務局長のK氏の故郷であった。K氏は「カクレキリシタン」の水方を務める家系に生まれ、オラショを聞いて育ったという経歴をもつ（木村 2006b）。教会建築の修繕・保存技術の確立は建造物としての教会を守ると同時に、地域の歴史を保全し、パーソナル・ヒストリーをつむぐ行為でもある。

しかしながら、長崎の教会群を世界遺産にすることへの思惑は、ただ「価値ある素晴らしい」教会を保存し、かつ広く人々に知らしめることのみにはとどまらない。そこには観光との調和という現代的な課題が常にクローズアップされてくるのである。「世界遺産の会」では当初より、教会の保存・公開と観光との調和を念頭においてきた。再び資料1を引用すれば、「教会と教会周辺の環境は都市部において多忙な日常を送っている現代人が、信仰の有る無しに関わらず、『心のバランスを取りもどし癒す空間』としての貴重な魅力と価値を有しており、観光資源として地域活性化の起爆剤となる可能性も秘めている」とされ、教会群が観光資源としての魅力と可能性を秘めている点を述べている。さらに「教会建築群を世界遺産に登録することは、必然的に外部からの交流人口に大きく門戸をひらくことになり、観光とどう折り合いをつけるかが大きな課題となる」ことを明言し、「観光と教会群保存は、ともすれば相矛盾する側面も有しているが、両者ができるだけ調和するような慎重な配慮が必要であり、観光のための道路、駐車場整備、売店の進出等が景観上の阻害要因になったり、文化財や環境の破壊となりうることに十分留意することが必要」であることを訴えている。

このような保全と観光資源化という一見矛盾したあり方は、世界遺産の考え方の根幹ともかかわる問題である。すなわち世界遺産条約の精神には、世界各地の顕著で普遍的な価値を有する遺産を保全・管理すると同時に経済的価値に置換し、観光による地域振興が企図されているのである（宗田 2006；奈良大学文学部世界遺産を考える会編 2000ほか）。

それでは実際に「世界遺産の会」では、どのような実践的活動がなされてきたのであろうか。次章では、「世界遺産の会」が手がけてきたイベントを検討したい。

IV 世界遺産運動の活動と人々のかかわり

IV-1 「世界遺産の会」の活動実績

第3表は「世界遺産の会」が主催・共催・後援するなど、これまでに手がけてきた各種イベントを示したものである。これをみると会の設立以降、継続的に活動がなされてきたことがうかがえる。これらの活動は学術活動と普及活動の両側面を有している。学術活動として、フォーラムやシンポジウム・講演会などが年に1～2回程度開催されているほか、写真展や教会を利用したコンサート、教会巡りのツアー企画といった一般市民へ教会群の魅力と価値を伝える啓蒙・広報活動が展開されている。開催場所も教会が密に分布する長崎市内や五島、平戸といった長崎県内をベースにしながらも、東京・横浜・大阪・福岡などの大都市圏で講演会や写真展を開催するなど活動の空間的範囲は広がっている。

長崎の教会群のもつ魅力をアピールする上で、一般市民を対象とした啓蒙活動は重要であるが、なかでも建築写真家・三沢博昭氏が果たした役割を看過することはできない。氏は国内外を問わず建築物や町並み、遺跡、土木構造物などをテーマに撮影しているが、2000年に発行された『大いなる遺産 長崎の教会』は大きなインパクトを与えた。同書は三沢氏の教会写真に加えて、建築の専門家で

第3表 「世界遺産の会」の主要な活動（2007年2月現在）

年	月日	イベント名称	備考
2000	8月19日・20日	2000年度建築修復学会・五島（奈留）大会	
2001	5月6日	世界遺産へのフォーラム in 佐世保	後援
	4月27日～5月7日	長崎の教会写真展	
	9月22日～24日	長崎の教会でのコンサート	
	9月22日～25日	長崎の教会を巡る旅	
	9月28日	世界遺産へのフォーラム in 東京	後援
2002	3月31日	長崎の教会群を世界遺産に in 外海シンポジウム	主催
	6月7日・8日	長崎の教会を巡る旅	
	10月12日	シンポジウム 長崎の教会群を世界遺産に	主催
	10月16日～20日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」展 長崎展	主催
	10月25日～11月3日	秋の五島列島 church week	協力
	10月31日～11月2日	五島教会巡礼ツアーとコンサート	
2003	11月17日	日帰り 五島教会巡り	協力
	9月29日～10月10日	模型とパネルで見る長崎の教会堂（長崎）	
	11月2日	トン・コープマン オルガンコンサート（浦上天主堂・長崎）	後援
	11月10日～29日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」展 東京展	主催
2004	11月11日～30日	世界遺産登録を目指して 第3回「長崎の教会群」展	
	5月10日～14日	長崎県の教会群の写真展（東京）	
	5月22日～8月29日	開国150周年記念 横浜・長崎 教会建築史紀行（横浜）	協力
	5月11日～21日	三沢博昭写真展『大いなる遺産 長崎の教会』（福岡）	
	6月18日～24日	三沢博昭写真展『大いなる遺産 長崎の教会』（大阪）	
	7月2日～8日	三沢博昭写真展『大いなる遺産 長崎の教会』（東京）	
	7月17日	講演会「教会堂の誕生 in 横浜・長崎」（横浜）	
	7月17日～25日	写真展「世界遺産への道 ながさきの教会群」（横浜）	
	7月25日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」横浜講演会	主催
	8月21日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」横浜講演会	主催
12月28日～1月11日	写真展「世界遺産への道 ながさきの教会群」（長崎）	主催	
2005	3月27日	Easter concert と外海路キリシタン紀行（黒崎教会・長崎）	協力
	4月6日	長崎歴史文化講演会（長崎）	後援
	7月8日～10日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」in 五島	主催
	10月18日～11月5日	「天主堂再考～模型とパネルで見る長崎の教会堂」展	
	12月24日・25日	市民クリスマスページェント（長崎）	
2006	10月28日・29日	「世界遺産への道 ながさきの教会群」in 平戸講演会	主催
	12月22日～27日	ザビエル生誕500年記念「長崎の教会群を世界遺産にする会」活動報告展（長崎）	主催
2007	2月14日	シンポジウム 長崎から世界遺産を！「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」（長崎）	共催

（「世界遺産の会」資料より作成）

あり「世界遺産の会」の会員でもある川上秀人氏の丁寧な解説が加えられた写真集であり、順調に増刷されている。川上氏は近畿大学産業理工学部の教員であり、長年にわたり長崎の教会群の建築学的調査に従事された研究者である。こうした専門家による長崎の教会群へのスポットライトが機縁となり、「世界遺産の会」が価値ある貴重な建造物としての教会群というまなざしを醸成するインキュベータとしての機能を果たしているものと考えられる。

もとより会の活動はこうしたイベントの運営にとどまるものではない。ローマやマカオといった海外の教会視察やバチカンへの協力要請、行政をはじめとする各種団体との連携など多岐にわたるが、本会の維持・運営は事務局長のK氏の献身的な努力に負っているところが大きい。次に「世界遺産の会」の活動事例として、筆者自身が参与観察をおこなった2006年10月の『「世界遺産への道 ながさきの教会群』in 平戸講演会』（資料2）（以下、平戸講演会）の様子を紹介するとともに、参加者に対して実施したアンケート調査に基づき、参加体験について検討したい。

IV-2 「世界遺産の会」の活動事例

平戸講演会は2006年10月28日と29日の両日、長崎県平戸市における講演会と教会見学会として実施された。講演会と巡検を組み合わせせた企画は、2005年の7月に五島で行われた企画に続いて2回目であった。

The flyer is titled "The road to the World Cultural and Natural Heritage" and "「世界遺産への道 ながさきの教会群』in 平戸講演・見学会". The main headline asks "「平戸の教会群の価値を共有しませんか」". It features a central illustration of St. Francis Xavier with the text "S. FRANCISCUS XAVIERI SSOCIETIVS". Below the illustration, it lists the dates "2006年10月28日(土)" and "2006年10月29日(日)". The flyer also includes contact information for the organizing committee and a list of sponsors.

資料2 平戸講演会用に作成されたリーフレット

1) 平戸講演会のエスノグラフィー

1日目(10月28日(土))は長崎駅を8時30分に出発し、諫早、大村(長崎空港)、佐世保で参加者を乗せて、教会見学ツアーが始まった。参加者は「世界遺産の会」会員と一般参加者を含めた約35名であり、借り上げバス1台に同乗した。午前11時過ぎに田平教会に到着し、教会見学会の案内者である川上秀人氏から教会の歴史や建造物の構造上の特徴について、教会の外観と内装の双方についての解説を受ける(写真1)。地元テレビ局や新聞社などのメディアによる取材もあり、会の活動は地域メディアを通して、広報・宣伝がなされている(写真2)。鉄川与助最後の煉瓦造教会堂として知られる田平教会は、明治期に黒島(現佐世保市)からの移住キリシタンによって開拓された集落の教会である。歴史の重みと建造物の重厚さで評判の高い教会であり、2003年に国指定重要文化財に登録された(写真3)。

田平教会を小1時間見学した後、昼食休憩をはさんで平戸島にわたり、午後一番に宝亀教会を見学した。宝亀教会の聖堂は木造の瓦葺で板張りの外壁であるが、正面のファザード部分は1間分が煉瓦で造られ、赤と白も色合いが美しい(写真4)。こちらは2003年に県指定重要文化財に登録されている。



写真1 教会建築の専門家による説明を受ける参加者
(2006年10月 筆者撮影)

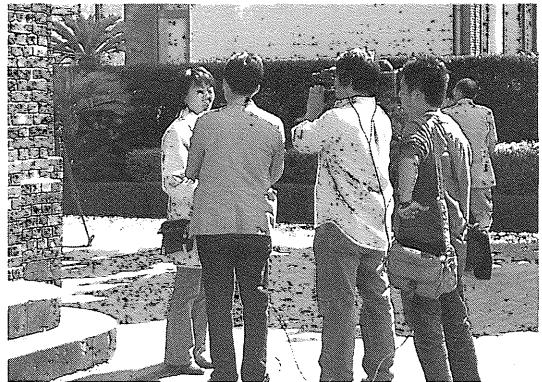


写真2 地元テレビ局による取材の様子
(2006年10月 筆者撮影)



写真3 国指定重要文化財・田平教会
(2006年10月 筆者撮影)



写真4 県指定重要文化財・宝亀教会
(2004年7月 筆者撮影)

川上氏の説明により教会建築の見方が示され、通常の見学や案内板の説明では知ることのできない部分まで理解することが可能である。建築上の特徴にとどまらず、我々が一般に理解している教会建築の様式でありゴシックやロマネスクといった分類も、長崎のレベルでは大きな意味をもたず、まさに東西文化の融合した独自の宗教的地域文化が創造されていることに気づかされる。

午前・午後一つずつ教会を見学した後、平戸市中心部に戻り、15時30分から平戸文化センター大ホールにて講演会が開催された(写真5)。講演会は入場無料で参加は自由である。開会に先立ち、生月島(現平戸市)に残るカクレキリシタンのオラショが唱えられ、会場の雰囲気を高めていた。基調講演およびNHK長崎放送局で作成された長崎の教会群の紹介ビデオが放映されたのに続いて、シンポジウムが開かれた。パネラーとして、長崎県内のカトリック神父、平戸市長、および文化財学と宗教社会学を専門とする研究者の計4名、さらに司会・コーディネーターを「世界遺産の会」会長である林一馬氏(長崎総合科学技術大学長)がつとめた。

発表・討論では各パネラーがそれぞれの立場から、長崎の教会群に対する考え方を述べた上で意見交換がされた。シンポジウムで出された発話の主旨を簡単に整理すると以下の通りであった。

カトリック神父のM氏:「世界遺産化の動きはカトリックと社会とのかかわりにおいて、新しい局面を迎えていることを意味している。これまでカトリックは、ややもすれば日本社会から無視される存在であった。教会がカトリックだけの財産ではなく地域の文化遺産であるという考え方は、カトリック内部では様々な考え方はあるものの、今後さらに理解・協力が進むものと考ええる。ただし重要な点として教会は単なる建造物ではなく、生きた信仰の場であること、信仰は過去のものではないことに留意する必要がある」。

文化財学のY.S.氏:「田平をはじめとする長崎の教会は歴史的な価値を有するとともに、自然景観と調和し、海に臨むロケーションに建てられている。こうした教会建築物は、長崎における精神文化の可視的な現れであるといえる」。さらに世界遺産への登録システムについての説明があり、今後は文化財としての普遍的な価値を示すことと、保存・管理の方法を明確にする必要性が説明された。



写真5 シンポジウムで発言するパネラー
(2006年10月 筆者撮影)

宗教社会学の Y.H. 氏：「現代は世界遺産観光がブームとなっており、中でも宗教文化への関心が深まっている。こうした動きのなかで聖地巡礼もまたブームになっており、観光と信仰との境界があいまいになるとともに、宗教の商品化といった現象が生起している。このように信者と観光客の双方をひきつける教会は、新しい地域のセンターになりうる可能性がある」。

平戸市長：平戸の歴史資産とまちづくりをテーマに、平戸の海外交流史および教会・歴史資源の紹介と今後の指針が報告された。

シンポジウムの後、市内のホテルで関係者による懇親会が開かれた。参加者は市内のホテルに分宿した。

2日目（10月29日（日））は朝8時半から平戸教会のミサに参加した。平戸市街地に隣接し、平戸観光の主要立寄り地になっている同教会は、日頃から観光客が多く見られ、保全と観光振興のディレンマを最も強く受ける教会の一つである（松井 2006）。続いて市内根獅子地区にあるキリシタン資料館を見学した。根獅子地区は平戸島のカクレキリシタンの中心地であり、1985年までカクレキリシタンの信仰が持続していた（宮崎 2001）。現在では儀礼の継承ができず廃絶してしまったが、1981年にこの地にキリシタン資料館が開設され、カクレキリシタンを含めた遺品の管理・展示がなされている。

その後、平戸島・生月島にある紐差教会、山田教会（写真6）、山野教会を見学した。いずれの教会においても川上氏による詳細な説明がなされた。紐差教会では、パイプオルガンの演奏が企画されており、集合当初は硬さもみられた参加者であったが、2日目になるとリラックスした雰囲気が見られ、パイプオルガンの演奏には大きな拍手が送られた。

この平戸講演会を通して、平戸市内にある6教会を見学するとともに、専門家のレクチャーを受け、地域の歴史と建造物に対する理解を深めるプログラムが準備されていた。ミサへの参加は生きている教会を体験させるものであり、平戸のカトリックを垣間見るとともに、本物の体験をも与える装置立といえる。メインのシンポジウムでは、アカデミックな場に慣れていない人にはやや難しい意見も



写真6 山田教会の内部を見学する参加者

(2006年10月 筆者撮影)

交わされたが、「世界遺産の会」が企図する長崎の教会群に対する啓蒙活動として、十分に機能するものであり、教会の価値と地域史との結びつきに対する理解を深める機会として好適であった。バスは15時ごろに平戸島を出て九州本土に戻り、佐世保駅・長崎空港を經由して、長崎駅で解散した。

2) 参加者は何を感じたのか

「世界遺産の会」の承諾を得て、参加者に対するアンケート調査を実施した。バス参加者に対して筆者らがA3サイズ両面刷りのアンケート調査票（資料3）を直接配布・回収を行った。最後の見学場所である山野教会を出発後に、車中にて直接回答していただいた。有効回答数は32枚（90%）であった。回答者の属性を簡単にまとめておこう。性別は男女同数であった。年齢は50歳以上が3分の2を占めており、個人参加者が比較的多く16名であった。グループ参加者の場合、家族もしくは女性の友人同士という例が卓越していた。居住地は長崎県内が16名で県内参加者と県外者が半数ずつを占めた。県外者の内訳は東京都6名、千葉県・埼玉県・福岡県が各2人であった。またカトリックの信徒は7名であった。

紙幅の関係もあり、本稿では資料3のうち参加動機、講演会・見学会で得られた教会への印象と自由記述に絞って分析を行う。参加動機については、選択肢のなかから該当する3項目を挙げてもらったところ、最多は『世界遺産にする会』への関心で24名、次いで「教会めぐりへの関心」が20名、「教会建築への興味」が17名と続いた。一方で「費用の安さ」を挙げた方は3名、「平戸の食や温泉への興味」はゼロであった。元々、教会めぐりや教会建築に関心のある人が参加していることもあるが、教会の背後にある平戸の食や温泉といった地域の観光資源にはそれほど関心を有していないことがわかる。参加者には「世界遺産の会」のメンバーが含まれていることに一因があるが、11名（34.4%）の参加者が平戸に初来訪であったことを勘案すると、いわゆる観光・遊山と目的意識が異なるのは瞭然であろう。

今回見学した6教会の印象について4点満点で評価してもらい、各項目別に平均点を算出して、さらに100点満点に換算した。最も高い数値であったのが「文化財として保護すべきだ」の96.7点であり、90点を超えたのが「再度、訪問したい」91.9点、「教会堂の建築（外観）が美しい」91.1点、「教会堂の内装が美しい」91.1点の4項目であった。以下、平均点数の高い順に示すと、「敬虔な気持ちになる」89.2点、「地域（教会）の歴史を感じる」87.1点、「観光資源として価値がある」86.7点、「教会の宣伝・広報活動をすべきだ」83.9点となっている。他方で平均点が80点未満であった項目としては、最低が「土産物店があるとよい」の49.1点であり、次いで「スタンプや巡礼路・宿泊施設を整備してほしい」が67.9点、「案内者（ガイド）がいるとよい」73.3点、「標識やトイレなど整備すべきだ」73.3点であった。

この結果から参加者の印象を判断すると、長崎（平戸）の教会に対し、建造物としての審美的・芸術的価値を高く評価していること、次いで歴史的価値や宗教空間としての場の性格を評価しており、再訪に値する場所であることを認めている。これに対して、観光資源としての価値は相対的に低く、さらには宿泊施設や土産物店の進出といった観光地化の進展には否定的な評価を下していることがわかる。

「世界遺産への道 ながさきの教会群」平戸講演・見学会参加の皆様へのアンケート
 長崎大学大学院 人文学部 7 研究科 1 教員 山中 弘
 長崎県立大学 人文学部 7 研究科 1 教員 山本 博
 長崎大学大学院 人文学部 7 研究科 1 教員 山本 博

趣旨
 私たちは、文部科学省科学研究費の助成を受け、長崎県におけるカトリック教会群の保全・活用と世界遺産への取組みというテーマで長崎県や関係市町村の協力を頂きつつ調査研究を進めております。この度、「上五島教会めぐりウォーク&ツアー」にご参加の皆様にご無事なアンケート調査を実施させていただくことになりました。なお本アンケートは厳密に学術目的で実施するものであり、それ以外に利用することはありませんので、どうかご協力を願います。

1) これまで平戸へ来たことがありますか。
 1 ある (1 回) 2 ない (今回がはじめて) 3 平戸の住みである (あつた)

2) 性別・年齢を教えてください。(Oで囲んでください)
 (男・女) (65歳以上、50～64歳、35～49歳、25～34歳、18～24歳、18歳未満)

3) ご参加は個人ですか、それともグループですか。
 1 個人参加 2 グループ参加 (人) (ご本人様を含めた人数をお書きください)

4) Oでグループ参加とお答えの方にお願いします。同行者の方どのような方でしょうか。(最もあてはまるものにOをつけてください)
 1 家族 2 友人・知人 3 職場の同僚 4 カトリック信徒 5 プロテスタント信徒
 6 その他 (具体的に)

5) ご職業を教えてください。(Oで囲んでください)
 1 農林漁業 2 商工業経営者 (自営業) 3 家庭従業者 4 会社員 5 公務員
 6 パート・アルバイト 7 主婦 (専業) 8 専門職 (医師・弁護士・看護師・教師など)
 9 定年退職・隠居 10 学生 11 無職 12 宗教者 (神父・牧師など)
 13 その他 ()

6) どちらから参加されましたか。
 1 長崎県内 (山内町名をお書きください) 山内町)
 2 長崎県外 (都道府県) (市町村)

7) 参加されたきっかけは何ですか。
 1 口コミ (知り合いから直接聞いた) 2 役場等の広報・パンフレット 3 テレビ・ラジオ
 4 インターネット 5 雑誌・新聞等の広告 7 教会の案内で
 6 その他 (具体的に)

(2) (裏面の(1)で「ある」と回答された方にお伺いします。) これまでどちらの教会を巡りましたか。選られたことのある地域の番号にOをつけ、立ち寄った主な教会名 (殉教地を含む) をお書きください。記憶に残っているものだけで構いません。
 1 平戸・生月・田平地区 (教会名・殉教地)
 2 佐世保・上五島地域 (ただし今回初めて訪れた方は除きます) (教会名・殉教地)
 3 長崎市・外海地区 (教会名・殉教地)
 4 下五島 (福江島) 地区 (教会名・殉教地)
 5 島原・雲仙・天草地区 (教会名・殉教地)

(3) (裏面の(1)で「ある」と回答された方にお伺いします。)「教会めぐり」をされるとき、どなたと一緒に遊ばれることが多いでしょうか。1つ選んで番号にOをつけてください。
 1 家族 2 友人・知人 3 職場の同僚 4 カトリック教会の関係者
 5 一般の旅行ツアー 6 個人
 7 その他 (具体的に)

(4) (裏面の(1)で「ある」と回答された方にお伺いします。)「教会めぐり」をされる動機は何ですか。下のなかから当てはまるものを順番に3つまで番号を選んで () にお書きください。その他の場合にはその内容を空欄にお書きください。
 1 番目の動機 () 2 番目の動機 () 3 番目の動機 ()
 1 信仰上の理由 2 教会建築に興味 3 スピリチュアルな (精神) 世界に関心
 4 度、訪れて興味を持った 5 巡礼 (巡路) に興味 6 ウォーキングに該当
 7 スタンプを収集している 8 地域や信仰の歴史を知りたい 9 観光目的
 10 居住地に近い 11 TVやラジオをみて 12 観光パンフレット類をみて
 13 教会の写真集をみて 14 巡礼に関する書籍をみて (例:長崎文庫社『教会・巡礼地ガイド』など) 15 カトリック文学の影響で (例:遠藤周作) 16 友人の体験を聞いて
 17 その他 (具体的に)

8) 参加された動機は何ですか。下のなかから当てはまるものを順番に3つまで番号を選んで () にお書きください。その他の場合にはその内容を空欄にお書きください。
 1 番目の動機 () 2 番目の動機 () 3 番目の動機 ()
 1 教会めぐりへの興味 2 教会建築への興味 3 (恐れ) キリシタン文化への興味
 4 ザビエルへの関心 5 「長崎の教会群を世界遺産にする会」の活動への関心
 6 平戸の歴史・文化への興味 7 平戸の食や温泉への興味 8 講演会への興味
 9 友人に誘われたから 10 費用が安かったから
 11 その他 (具体的に)

9) 今回の「講演会・見学会」の内容についてお伺いします。
 (1) 今回の企画で印象深い教会・施設はどこでしたか (複数回答可)。なかでも特に印象に残ったものには◎をつけてください。
 1 田平教会 2 宝亀教会 3 基調講演 (山田先生) 4 教会群紹介ビデオ
 5 シンポジウム 6 平戸教会のミサ 7 切支丹資料館 8 租界教会 9 山田教会
 10 三浦教会 11 その他 (具体的に)

(2) 平戸 (田平) の教会についてどのような印象を受けましたか。「4 強く思う」「3 そう思う」「2 そうは思わない」「1 全くそう思わない」の4段階で評価してください (数字にOをつけてください)。

教会堂の建築 (外観) が美しい	4	3	2	1
教会堂の内装が美しい	4	3	2	1
地域 (教会) の歴史を感じる	4	3	2	1
朝礼 (礼拝) に気持ちよくなる	4	3	2	1
文化財として保護すべきだ	4	3	2	1
観光資源として価値がある	4	3	2	1
修業やトイレなど整備すべきだ	4	3	2	1
教会の宣伝・広報活動をするべきだ	4	3	2	1
スタンプや巡礼路・祈禱施設を整備してほしい	4	3	2	1
案内者 (ガイド) がいるとよい	4	3	2	1
土産物店があるとよい	4	3	2	1
再度、訪問したい	4	3	2	1

10) 長崎県における「教会めぐり」の体験についてお伺いします。
 (1) これまでに長崎県の「教会めぐり (巡礼)」をしたことがありますか。
 1 ある (一(二)以下の質問すべてにお答えください)
 2 ない (一(二)以下の質問にお答え下さい) **※アンケート下は裏面に続きがあります**

(5) カトリックの信徒でいらっしゃいますか
 1 はい (教会) (都道府県) 2 いいえ

11) 「長崎の教会群を世界遺産にする会 (世界遺産の会)」についてお伺いします。
 (1) 会の存在を事前に知っていましたか。 1 はい 2 いいえ

(2) 会の活動内容を知っていますか。知っている方はその内容について簡単に教えてください。
 1 はい (内容)
 2 知らない

(3) 実際に見学させてみて、長崎の教会群は世界遺産に登録される価値があると思いますか。
 1 思う (理由)
 2 思わない (理由)
 3 わからない

12) 今回の「講演会・見学会」に参加されて、どのような感想をもちましたか。ご自由にお書きください。次回以降の参考にさせていただきますので、ぜひご意見をお願いいたします。

質問は以上となります。ご協力ありがとうございました。
 本アンケートについての問い合わせ先: 山本 博 (電子メールアドレス) 029-863-****

最後に自由記述欄に記載された言説をもとに、教会群の世界遺産としての価値や「世界遺産の会」の活動に関する考え方を読み取ることにしよう。第4表は、長崎の教会群が世界遺産としての価値をもっているかどうかについての問いに対する回答である。いずれも肯定的な見解を寄せているが、教会建築のもつ技術的価値・審美的価値（番号1、2、5、7、12）に加え、周辺環境の良さ（番号5）や文化的・歴史的背景（番号3、7、10、11、12）をその理由にあげている。一方で観光化の進展に不安を覚え、信仰の場・生活の場としての原風景を残したいという考えもみられた（番号6）。

第5表は、全体のプログラム終了後の自由意見を集計したものである。ここでは世界遺産化への対応についても一部言及がなされているが、第4表との間で調整はしていない。また言説番号も第4表とは対応していない。シンポジウムに関しては、テーマ設定と進行の難しさ（番号2、10）や世界遺産登録に向けての自治体の協力不足に対する危機意識（番号8）を指摘する意見が挙げられたが、他方で世界遺産登録への期待が確実に高まっていると感じた参加者も多くみられた（番号5、9、14、17）。教会見学会（巡検）に関しては、参加者がいずれも満足を表明している。専門家の案内による教会建築への理解の深まり（番号4、7）や禁教による弾圧のなか教会を守ってきた信仰の強さ（番号15、16）に感慨を覚えた人、またこれを縁としてさらに教会をめくりたいと考える人（番号9、19）もみられた。

筆者の参加したこの事例をもって「世界遺産の会」の活動を判断するのは早計であるが、設立以降の6年間に及ぶ地道な活動が確実に定着しつつあり、長崎の教会群が文化財としての価値を有する建

第4表 平戸講演会参加者における世界遺産としての価値への思い

1	明治、大正の技術、ヨーロッパに行っていないのにできる想像力。そのような面を踏まえても世界遺産に登録されてもよい建築物だから。
2	建築的価値、信仰を保ってきた。
3	歴史的なものを考えて教会をみることに価値があると思います。
4	消してはいけないと思う。
5	建物が魅力的、周囲の環境がとても良い。
6	信仰の場、生活の場としての原風景を残したい、極端な観光化に反対、キリスト教・仏教・神道の共通の理解のうえで進めたい。
7	教会の建物自体もすばらしいが、それ以上に密着し長い歴史が一つ一つの教会が違ってそれぞれが特徴をもっている。また日本らしさを持っていることも重要・大切だと思った。今まで海外の教会に行ったことはあるが、ここ長崎では本当に西欧とは違った面がありとても興味深かった。また隠れキリシタンの人々の信仰の深さ、いかにそれを守り続けてきたのか・・・とても感動を受けた。もっといろいろ知りたいし知らなければならないのではないかと感じた。そういった意味でもっとPRをしてもよいのでは？
8	文化遺産として価値がある。
9	世界的にも類例のないものと考えています。
10	建物を含めた文化的歴史的背景は世界に類がない。
11	教会建造物の価値的視点より、地理的・歴史的観点、何より世界に類を見ない隠れ・潜伏キリシタンの殉教地域として世界遺産の価値がある。
12	建築上・歴史上登録する価値があると思う。

（アンケート調査より作成）

第5表 平戸講演会を終えての感想

1	たくさんの人に見てもらいたいと思う反面、観光地化するのはいや。
2	シンポジウムは方法が難しいと常々思います。主催者の意図を伝える一方で一般の人の意思を伺う姿勢が必要でしょう。
3	参加者の熱意に感動しました。
4	今まで建造物は大きい、小さい、きれい位でしかみていなかったのですが、内容のことも少しは考えて観るようにしたいと思います。
5	平戸市長、教会の方、大学の建築の先生、哲学の先生等わかりやすくそれぞれの立場のお話を伺えてよかった。林先生の「カンタンですよ。全世界のカトリック信者が応援してくれると言っています」といわれた言葉が心に残りました。
6	この機会があってよかったと思っています。教会の存在がすべての人々のためにある共有することについて賛同の気持ちを持った。信者だけのものではないというアピールをさらにしていくことの大切さを痛感した。
7	川上先生のご説明があったのでより興味をもって建築物をみることができました。鳥の入り江ごとに小さな教会が五島には沢山あると聞いています。是非行ってみたいのですが、ガイドが同行してくれればとてもいいのと思います。教会めぐりのツアーがあると是非参加させて頂きたいと思っています。
8	世界遺産への申請の件が大きく取り上げられたが、何をテーマにするかが見えてこない。容易に世界遺産になるかの様な発言があったが、長崎県・長崎市以下の自治体の一体化が見られない。県民・市民・町民を巻き込んだボトムアップでないと。今回のテーマ、価値の共有が計られたとは思わない。世界遺産と宗教観光化など地元の人たちとの対話ができれば。
9	今回のツアーに参加できた事、とても良かったと思っています。「ながさきの教会群」が世界遺産に登録される日を楽しみにしています。今後の活動も引き続き頑張ってください。また是非長崎に来たいと思っています。是非英文の資料など作成していくと良いのでは？今後も大勢の外国人の人々が来ることと思います。
10	講演会の内容、専門的である。欲を言うならもう少し深く掘り下げても良いと思う。今後もどしどし講演会を行ってください。特に長崎市内でも。
11	次回も参加したいと思います。世界遺産登録に向けて今後は、多くの支持者（応援団）を得るために、本会活動の内容を幅広く発信・広報することが必要といえます。
12	多くの方々に参加頂いて感謝しています。
13	教会の内外を改めて知ることができました。講演・シンポジウムに参加できいろいろ知るチャンスを得ました。
14	世界遺産への実現はそう遠くないと感じた。そろそろ実現後のソフト面も考えてもいい程に。
15	教会の建物の美しさ、それを守って来られている信者の方たちの奉仕の精神と信仰の強さに感銘を受けました。私自身は信徒ではありませんが、キリスト教だけではなく、仏教にも興味もっています。シンポジウムで先生が「現在は信者ではないが、宗教・巡礼・宗教建築などに様々な個人的理由により興味を持っている人々が多い」という社会現象があると話されました。私もその現象を作っている者の一人に当たるのではないかと思います。今の世の中の動きを言葉ではっきりと説明していただくことにより、よく理解できました。今回、このツアーに参加してとても良かったです。
16	東京でのセミナーや9月11日のトークコンサートで興味をもち、長崎の浦上、大浦天主堂の延長として長崎の教会群を見るとき、厳しい弾圧の下で気づいてきたそれぞれの教会が一つ一つ意味深いものを現地を巡って実感しました。企画、講師の先生方、参加された方々も皆様素晴らしいです。ありがとうございました。
17	少しずつ世界遺産に近づきつつあるのが嬉しいです。
18	短い（時間的・地理的）ツアーにもかかわらず、大勢の識者、専門家を集めてそれぞれの立場からの講演あり、意見あり、話ありで興味深い。参加者各人もっと意見、感想を言い、親交を深め、参加意欲を深め、より高い達成感を持てるようなツアーが今後はいいかなと思います。
19	はじめての参加でしたが、各地に残っている素晴らしい教会を見学できて、よい体験となりました。これからも沢山の教会を見たいと思います。

(アンケート調査より作成)

造物であり、それを生み出した地域の歴史・文化、景観を含めた理解と保全への動きに結びついていることは確かであろう。最後に、長崎の教会群のような宗教的地域文化を遺産化することの意味を検討し、小論の結論に代えたい。

V 宗教的地域文化を世界遺産にすることの意味

先述したように日本では2006年度より、世界文化遺産への登録が都道府県への公募を通して審査されることとなった。したがって従来にも増して行政との連携が必要とされている。長崎県の場合、同じ世界遺産候補として長崎市内の軍艦島を抱えていることや（第1表、番号20）政教分離の原則との兼ね合いから「長崎の教会群」を積極的に世界遺産候補として推進する態勢が十分に整っているとはいえなかった。しかしながら、今回その文化遺産としての価値が評価され暫定リスト入りが決まると、これを積極的に支援しようとする動きも生じている。例えば、2007年の2月には長崎県教育委員会主催による「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」シンポジウムが開催された（第3表）。これは暫定リスト入りに正式に推薦されたことを受けて、世界遺産早期本登録に向けた動きとして開催されたものである。このような世界遺産本登録に向けた動きが今後、さらに活発化することが予想されるが、同時に、宗教的地域文化が文化財や文化遺産としてのまなざし（gaze）を受けることの影響を考える必要がある。

2006年11月に文化庁あてに提出された提案書では、文化資産の普遍的な価値について次のような主張がなされた（長崎県ほか2006）。

- ①長崎の教会群とその関連遺産は、世界史に類を見ない長期の潜伏からの劇的な復活という歴史性を背景にして、抑圧からの解放と教会への復帰の喜びという崇高な精神性を象徴している。また辺りで狭隘な場所に点在する概して小規模な教会は、信徒たちが弾圧を避けて潜伏し、連綿として信仰を継承してきたその地区に建ち、かつ彼らが貧しい暮らしにもかかわらず自らの財産と労力を捧げ、信仰の証として造り上げたことを如実に物語っている。
- ②教会群と関連資産は、一部国立公園などに指定された地域の特色ある自然地形との緊密な関係のもと、鳥々の入江地や海に面した高台斜面などに農漁業を生業として造り上げた集落景観と一体となり、長期の潜伏からの復活という高い精神性を背景とした地域住民の生活と精神の拠り所として、優れた文化的景観を形成している。
- ③長崎の教会群は、広義には当時世界的な潮流であったゴシック・リバイバル期に属するが、西洋の様式技法をもたらした外国人神父の指導と鉄川与助など日本人人工棟梁の伝統的技術に基づく創意工夫によって建設されたため、そこには西洋と東洋の建築文化が見事に融合した実に多様な展開と高い造形意匠の達成を見ることができる。また内部装飾に樅の模様を取り入れるなど地方的特色もあり、この意味では世界的に珍しい独特な構造物群遺産となっている。（下線はいずれも筆者）

この3項目をみると宗教的地域文化として、(1) 世界に比類のない特徴的な宗教的歴史性、(2) 地域の風土が育んだ文化的景観、(3) 東西文化が融合して達成された独自の宗教建造物、という点が挙げられている。

また第2表に示した世界文化遺産の登録基準として示された「普遍的な価値」として、iを除くすべての項目に該当するとしている。やや長文になるが提案書から引用を示す(長崎県ほか 2006)。

ii) に該当する理由：長崎の教会群とキリスト教関連遺産は、大航海時代におけるキリスト教と西洋文化のわが国への伝来と融合、鎖国時代の禁教下における伝承、そして開国後の新たな交流という、世界に類例のない東西文化の複雑な交流過程を顕著に示している。

iii) に該当する理由：長崎の教会群は16世紀末からの殉教や弾圧にも関わらずキリスト教信仰が連綿として継承され、現在も生き続けていることの物証として無二の存在である。

iv) に該当する理由：長崎の教会群は、外国人神父の指導と日本人大工棟梁の伝統的技術に基づく創意工夫によって建設されており、それらは、日本における教会建築の発展過程や、西洋と東洋の建築文化が融合した多様な展開と高い造形意匠の達成を示す見本である。

v) に該当する理由：長崎の教会群は、大部分が県内でも辺りでも狭隘な潜伏時代の居所に点在していて、現在でも地域のそれぞれにおいて特色のある自然地形と緊密な関係のもと、農漁業を生業として造り上げた集落景観と一体となり、地域住民の生活と精神の拠り所として、それぞれに優れた文化的景観を形成している。

vi) に該当する理由：長崎の教会群とキリスト教関連遺産は、迫害と殉教、また世界史に類を見ない250年の潜伏からの劇的な復活という世界に大きな衝撃と感動を与えた出来事の直接的な舞台である。さらに、本資産は日本の著名な文学作品の主題及び舞台になっており文学史のなかでも重要な位置を占めている。また、400年を経て今なおカクレキリシタンに歌い継がれている「オラシヨ」は、宣教師によりもたらされた典礼音楽のグレゴリオ聖歌や16世紀のスペインの一地方の聖歌を原形とし、当時の形態を伝承するものである。(下線はいずれも筆者)

文言は一部重複しているが、その部分こそがまさに教会群の「顕著で普遍的な価値」であるとみなされているということができよう。普遍的価値の源泉とローカルな地域史の文脈とは不可分の関係にあり、そのローカルな歴史的固有性を体现しているのが宗教文化としての教会群の建造物や関連史跡などの遺産なのである。このような宗教的地域文化は住民の自発的な宗教行為や生業活動によって維持されてきたが、世界遺産運動はこうした営みに対し、オーソリティを付与する行為に他ならない。

宗教的地域文化を世界遺産化することの意味として最後に2点指摘したい。小川(2002)は、現代

社会とはあらゆるものが文化遺産になりうる時代であるとし、それらのうちの何ひとつとして最初から文化遺産であったものなどなく、ある種の意味創出作用を経て初めてモノは文化遺産になることを指摘した。小川によれば文化遺産を生み出すための営みとして保存と公開がもっとも重要であるという。保存の営みには当該社会の価値観が強く投影されるものであり、保存と公開のプロセスによって、モノが本来依存してきたローカルな文脈から切り離され、新しい抽象的で普遍的な文脈のなかに再編制されるからである。小川の議論を敷衍するならば、教会群の世界遺産化が図られるプロセスは、同時に教会が個々の宗教的・地域的文脈から切り離されて、歴史や遺産というモノに置換されることを意味している。いわゆる宗教のモノ化の進行につながるプロセスであり、モノ化された宗教は流通し、消費され、やがて消尽される危険性を有する。

宗教的地域文化に文化財としての冠を与えることは諸刃の剣である。人々にその価値を見出させ、後代に残していくための有効な方策であることは論を待たない。しかしながら、文化財への登録とは個々の宗教的地域文化に対して新しい価値を付与することに他ならない。それは本来有している宗教的価値に加えて、芸術的あるいは審美的、経済的、歴史的、文化的な価値などを付与する行為である。教会建築物は信徒にとって儀礼の場としての宗教空間であるとか、生活の場としての社会空間として建設されたものであり、芸術的価値や歴史的価値とは無縁であった。しかしながらこれらの世俗的な価値が付与されることによって、否応なしに教会の世俗的序列化がもたらされることになる。国宝・国の重文、県指定の文化財、無指定といった文化財のカテゴリーが、あたかもその宗教的地域文化の価値付けとしてみなされる危険性、モノ化・商品化といった問題が突きつけられることになる。

他方で、遺産化の試みはネガティブな面のみが強調されるべきではない。世界遺産というワールドスタンダードな価値付けは、ローカルな宗教的地域文化に普遍的な価値を与えることになる。安福(2000)は20世紀後半において「場」の社会的イメージ形成を決定するために、ツーリズムは重要な要素であったとし、文化遺産を世界遺産にすることの意味として、地域や国単位での文化の独自性をもち、世界においてローカルな存在であった文化遺産が、世界遺産に登録されることにより、顕著で普遍的な価値をもつものとして、その独自性がグローバルな舞台において強化されることを指摘した。

平戸講演会でM神父がいみじくも言及したように、長崎においてキリシタンは、社会的マイノリティの存在として位置づけられてきた。カクレキリシタンや殉教といった長崎の宗教的地域文化の価値が、「世界遺産の教会」「世界遺産の史跡」という形でオーソライズされ、これまで裏面史的な扱いであったキリシタン文化が積極的な意味を顕にすることになる。地域の表舞台にたち、長崎の「伝統」や「歴史」が語られるときそのシンボルとして世界遺産の教会群は機能するのであり、長崎のローカルな宗教的地域文化を「顕著で普遍的な価値」をもつものとしてグローバルな舞台に止揚するのである。キリシタン文化が信徒の誇りやアイデンティティの確立に寄与し、歴史的・体験的記憶としてのキリシタンを具現化するともいえるのである(山中 2006a)。

このような新しい価値の付与にともなう従来の価値観の変容・転倒が地域文化に与えた影響を考える上で濱田(2006)の論考が示唆的である。濱田は民芸運動を産業振興的な意味合いをもったものではなく、製品の価値を変容させるひとつのまなざしである点に着目したが、長崎の教会群も、ま

さに教会の巡礼ネットワークが構築され、「群」としてのまなざしを受けるようになりつつある（木村 2006a）。世界遺産運動の高まりのなかで、カトリック教会やほかのアクターたちの動きも活発化し、教会や殉教地が聖地巡礼の場として構築されている（松井 2006）。個々の教会や殉教地の場所自体はそのままであっても、そこに付与される意味づけが変容させられ、ある種のまなざしを受けることにより、場所に新たな価値が付与され、再編成を余儀なくされているともいえる（山中 2006b）。

「自分たちの教会が世界遺産になる」。まさにこれは文化の発見であり、対象への価値転換が生じる。世界遺産という究極の価値付けを与えられた教会は普遍的な価値を帯びたものとして、外部者からのまなざしが注がれ、同時に太田（1998）が文化の客体化論で示したように、それを内部者自身が操作できる対象として新たに創り上げられてもいるのである。

このように文化が他者のまなざしを受け、自己変容を遂げていく過程のなかで、場所の消費という問題が生じてくる。長崎の教会という宗教的地域文化に世界遺産という価値が付与されるとき、そこにはこれまで以上に熾烈な商品化という波に洗われることになろう。一般にあるモノが商品化されるためには、生産のコンテクストから分離されて交換可能になることが必要とされる。教会がその場所に根ざし、生業活動や風土、歴史の蓄積のなかで維持されてきた生活のコンテクストから切り離され、場所自体がひとつの情報として生産・消費されることになる。世界遺産という概念と理念は人類の叡智ではあるが、その遺産が地域と結びついたものであればあるほど、遺産化により地域が受ける影響は多方面に及ぶのである。

VI おわりに

今回の世界遺産候補としては、国宝の旧大浦天主堂や国指定重要文化財の黒島天主堂、青砂ヶ浦天主堂など12の教会関連施設と鳥原の乱の殉教地である原城跡など8のキリスト教関連遺産が挙げられた。これらはいずれも歴史的に重要な文化遺産であるが、同時に信徒にとっては大切な信仰の場・生活の場であり、単なる歴史的な遺物ではなく生きられた宗教空間であることも推薦の重要な決め手であった。

地域に目を向けると、教会群が分布する五島列島などでは、少子高齢化による過疎化が進行し、信徒たちの力だけでは教会堂の維持が困難な状況にある。長年の風雨に耐えてきた教会建造物にも破損が目立ち、倒壊の危機にさらされる施設もみられる。世界文化遺産に登録されることにより、国や地方自治体からの財政上の支援を受け、教会堂をはじめとする貴重な宗教施設が文化財として保護されることに期待する教会関係者も多い。

一方で世界遺産に登録されることに対する不安の声も聞かれる。周知のように、世界遺産運動は外部の社会経済的環境と密接に関連している。「五箇山・白川郷の合掌造り集落」や「紀伊山地の参詣道」の例をみても、将来的に世界遺産に登録されれば、観光客が激増することが予想される。バブル経済崩壊以降、観光消費額の低迷が続く長崎県では、教会群に対し観光振興の切り札としての期待も大きく、観光を促進したい地方自治体や観光関連業界などの様々な思惑も見え隠れする。信仰の場が観光客に荒らされはしないか。先祖から大切に受け継いできた信仰が見世物にされるのではないか。教会

群を観光資源化しようとする動きが強くなれば、教会堂の本来の意味である祈りの場としての宗教空間が変容する危険性を孕んでいることは否めない。

宗教的地域文化が「遺産化」されることは、それが有している宗教的価値に「歴史」や「伝統」といった世俗的な価値を付与する行為である。世界遺産とは人類の普遍的な価値と考えられているが、宗教的価値とは本来、無関係な価値である。しかし将来的に、世界遺産に登録される教会とそうではない教会に峻別されるとしたら、そしてそれがあたかも教会の価値として、人々の心の中に刻まれるとしたらどうであろうか。世界遺産になることはいろいろな問題を我々に提起するのである。

現地調査の際には、「世界遺産の会」事務局長の柿森和年氏をはじめとする会員の皆様には多くのご便宜を賜った。またアンケート調査の実施や本稿を執筆するにあたって、筑波大学教授の山中 弘先生および長崎国際大学教授の木村勝彦先生には多くのご教示をいただいた。記して厚く御礼申し上げます。本報告の取りまとめにあたり、平成 18 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B)「場所をめぐる宗教的集合記憶と観光的文化資源の関係に関する宗教学的的研究」(研究代表者:山中 弘, 課題番号:18320018)および平成 16～18 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B)「日本農業の担い手からみた農業維持システムの地域動態的研究」(研究代表者:田林 明, 課題番号:16300291) および、平成 18 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C)「南西諸島における高齢化対応型地域社会の形成と構造に関する人文地理学的的研究」(研究代表者:須山 聡, 課題番号:18520611)の研究費の一部を利用した。

本稿の骨子は、2006 年 12 月に開催された(財)国際宗教研究所主催公開シンポジウムで発表した。

参考文献

- アーリ, J. 著, 加太宏邦訳 (1995):『観光のまなざし - 現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局, 289p.
- アーリ, J. 著, 吉原直樹・大澤善信監訳 (2003):『観光のまなざし - 現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局, 406p.
- 上野邦一 (2007):日本での世界文化遺産登録と課題 - 奈良会議の意義 -. 歴史地理学, 49 (1), 71-85.
- 小川伸彦 (2002):モノの記憶と保存. 荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社, 34-70.
- 遠藤秀樹 (2005):観光社会学の対象と視点 - 自省的な観光社会学をめざして -. 奈良県立大学「研究季報」, 15 (4), 11-20.
- 遠藤秀樹・堀野正人 (2004):『「観光のまなざし」の転回 - 越境する観光学 -.』春風社, 241p.
- 太田好信 (1998):『トランスポジションの思想 - 文化人類学の再想像』世界思想社, 317p.
- 川上秀人・土田充義 (1983):長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程について. 日本建築学会論文報告集, 331, 155-163.
- 川上秀人・土田充義・前川道郎 (1985):長崎県を中心とした教会堂建築の時代区分について. 九州大学工学集報, 58 (3), 111-117.
- 神田孝治・小野田真弓 (2005):世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録と和歌山県の観光・リゾート政策. 和歌山地理, 25, 71-79.
- 木村勝彦 (2006a):長崎のカトリック教会群と「観光のまなざし」 - 外海を事例として -. 山中 弘編『「場所の聖性」の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究』平成 15～17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書, 36-44.
- 木村勝彦 (2006b):長崎の教会群と世界遺産. 日本宗教学会第 65 回学術大会パネル「宗教とツーリズム」発表予稿集, 7p.
- 合田昭二・有本信昭編 (2004):『白川郷 - 世界遺産の持続的保全への道 -.』ナカニシヤ出版, 213p.
- 才津祐美子 (2006):世界遺産の保全と住民生活 - 「白川郷」を事例として -. 環境社会学研究, 12, 23-40.
- 社団法人日本ユネスコ協会連盟公式ホームページ:
<http://www.unesco.jp/contents/isan/>
- 文化庁 (2007):文化遺産オンライン.
<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>
(最終閲覧日:2007 年 2 月 28 日).
- 内閣府政策統括官室 (2005):地域の経済 2005 - 高付加価値化を模索する地域経済 - <コラム 1 世界遺産の観光客数 >.

- http://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr05/pdf/chr05_koramul.pdf
- 長崎県・長崎市・佐世保市・平戸市・五島市・南島原市・小値賀町・新上五島町 (2006) : 『世界遺産暫定一覧表追加資産に係る提案書 資産名称 : 「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」』 21p.
- 長崎文献社編・カトリック長崎大司教区監修 (2005) : 『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』 長崎文献社, 148p.
- 奈良大学文学部世界遺産を考える会編 (2000) : 『世界遺産学を学ぶ人のために』 世界思想社, 306p.
- 羽生冬佳 (2006) : 世界遺産登録地域の観光入込み客の推移. 地域再生と観光プロジェクトニュース, **4**, <http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/~heritage/Chiikisaisei/Newsletter/volume04.htm>
- 濱田琢司 (2006) : 『民芸運動と地域文化—民陶産地の文化地理学』 思文閣出版, 290p.
- 松井圭介 (2005) : ツーリズムの影響にともなう聖地管理の課題—Shackley, M.: *Managing sacred sites* を手がかりとして—. 人文地理学研究, **29**, 159-169.
- 松井圭介 (2006) : 観光戦略としてのキリシタン—宗教とツーリズムの相克—. 人文地理学研究, **30**, 147-179.
- 三沢博昭 (写真)・川上秀人 (解説) (2000) : 『三沢博昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会』 智書房, 240p.
- 宮崎賢太郎 (1996) : 『カクレキリシタンの信仰世界』 東京大学出版会, 287p.
- 宮崎賢太郎 (2001) : 『カクレキリシタン』 長崎新聞新書, 295p.
- 宗田好史 (2006) : 世界遺産条約のめざすもの—ICOMOS (国際記念物遺産会議) の議論から—. 環境社会学研究, **12**, 5-22.
- 安福恵美子 (2000) : 文化表象としてのツーリズム—近代におけるアトラクションの社会的構築—. ソシオロジ, **44** (3), 93-107.
- 山中 弘 (2006a) : 「場所の聖性」の変容をめぐる葛藤—五島列島の「教会めぐり」—. 同編 『「場所の聖性」の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究』 平成 15～17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書, 45-50.
- 山中 弘 (2006b) : 宗教とツーリズムに関する分析をめぐって. 同編 『「場所の聖性」の変容・再構築とツーリズムに関する総合的研究』 平成 15～17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 C) 研究成果報告書, 4-10.
- Shackley, M (2001) : *Managing sacred sites: service provision and visitor experience*. Continuum, London, 206p.

The Gaze for Local-religious Culture in a World Heritage Movement

MATSUI Keisuke

The purpose of this paper is to examine a significance of some local-religious cultures as a World Cultural Heritage movement through analyzing Nagasaki Church Group in Japan. Recently, a movement for World Cultural Heritage registration is notable in our country. Various actors such as a local government and tourism industries, tourists or a host support this movement with a hope for social-economic effects.

In this paper, I described the activities of the Association for declaring the Nagasaki Church Group a World Heritage. This association is now consists of volunteers with interest in churches of Nagasaki including well-informed persons, citizens, students, Christians, and also public employees. They hope to achieve the World Heritage registration for the Nagasaki Church Group. They think that: it is often said "Compared with the European churches, the Japanese Churches are neither as beautiful nor as ancient." But if we take the survival of a persecuted faith, the beautiful melting of each building with the natural environment, the simplicity and creative use of limited resources, we can assuredly state that they are unique in the whole world.

I examined their discourses what they think of the values of churches in Nagasaki. There are three points such as historical value, the value of the church buildings and value as cultural landscape. They insist on the Nagasaki Church group is the result of the encounter of the cultures of the East and the West, harmonized with the natural landscape, which gave birth to a beautiful unique architectural style.

For the registration of World Heritage, they think that these five points are important: (1) Importance of maintaining the buildings and "the living church" together, (2) Necessity of maintaining the surrounding environment, (3) Necessity of maintaining the surrounding environment, (4) Harmony with tourism, and (5) Technical details for the churches preservation.

The Nagasaki Church group was selected the World Heritage candidates in Japan on Jan.23, 2007. I would like to and I have to watch this movement more carefully, more over, I have to reflect on a meaning of registering religion with a World heritage.

Key words: World Heritage, Nagasaki Church Group, local-religious culture, gaze